

〈特別企画「AJELの歩みを振り返る」〉

闘う知識人、増田昭三先生

安村直己

1.

増田昭三(筆名 義郎)先生は、晩年にいたるまで、知的探究心¹⁾と社会的使命感につきうごかされて闘う知識人であり、ラテンアメリカ地域研究者であり続けた。

最後の言明は当然すぎると思う読者も少なくないだろう。しかし、私自身と比較すると、当然だとは言いきれない。専門はラテンアメリカ社会史だとしていながら、対象地域はほぼメキシコだけなのである。それに対し、先生の知的探究の対象はラテンアメリカ全域であり、それは文献上の知識を超え、現地の研究者との交流にまで及んでいた。

一例を挙げよう。1999年の夏、メキシコのモレリア市で開催された国際学会に参加していた私は、昼食時、コレヒオ・デ・メヒコ歴史学部教授のホセフィナ・バスケスとかつての教え子たちや、ブライアン・ハムネット、フランソワ・ゲーラといった年長者と同席することとなった。日本人がいることに配慮したのか、バスケス教授は増田先生がコレヒオを訪ねた際の思い出を語りだす。しかも、教え子たちやハムネットもその記憶を共有しているようで、私は戸惑いを禁じえなかった。

1981年に大学に入学して以来、人的交流という面に限ると、増田先生はアンデス研究者であると私の目には映っていた。先生が海外から招く研究者は、スペイン人を除くと、ほぼアンデス研究者に限られていたからである。

『アステカ王国』や『メキシコ革命』などメキシコを扱った著作は周到的な文献調査の成果だと、私は思い込んでいた。バスケス教授たちの話は、長年の思い込みを打ち砕いた。おそらく1970年代初頭のこと、増田先生はバスケス教授を訪ね、院生たちも交えて談笑されたのだろう²⁾。日本ラテンアメリカ学会創設メンバーにふさわしく、ラテンアメリカ各地で人的交流に努められたことを実感した瞬間だった。

2.

海外調査が今より困難だった1970年代初頭、上記の著作の文献目録に名前の出てこないバスケス教授を訪ねるフットワークの軽やかさは、知的探究心の現れといえよう。この探究心に導かれ、増田先生は、南北アメリカ大陸を地球規模の人どもの、思想の移動のネットワーク形成のなかで理解すべきだと考えられるようになり、ラテンアメリカの境界を越えていく。

こうした発想の源泉として世界システム論を挙げるとすれば、それは短絡的にすぎる。1971年に公刊された『新世界のユートピア』にはすでに環大西洋的な思想のネットワーク形成に関する視点が明確だし、いわゆるジャンボ・ヒストリーを代表する歴史家マクニールの『世界史』を訳出されたのも同年であるのに対し、ウォーラステインの『近代世界システム』の刊行は1974年である。増田先生もウォーラステインもブローデルの『地中海』などに触発され、それぞれの視点からグローバルなネットワーク形成の解明に取り組んだと見るべきだろう。

ただ、学生の眼から見ても、1980年代の増田先生が世界システム論に関心を示され、ジャンボ・ヒストリーの執筆に意欲を示されていたのは事実である。この意欲は『コロンブス』、『略奪の海 カリブ』、『黄金の世界史』、『太平洋 開かれた海』として結実していった。いずれも、最新の研究を活用して細部を固め、壮大な構想の下にそれらを的確に配置し、平易な文章で書かれたことで、一般読者が知的興奮を感じながら読み進められる名著である。

特筆すべきは、1984年に刊行された『大航海時代』である。日本語読者に対し、日本史と世界史という垣根をまたぐことの大切さを伝えるべく、冒頭に鉄砲伝来の逸話を置き、終章で鎖国までの日欧関係を扱うといった工夫をされているからである。そこに私は、増田先生の闘う知識人としての真骨頂を見出している。

3.

増田先生は学生に対し、口癖のように、「きみ、ラテンアメリカ研究で大成しようと思ったら米国で博士号をとらないといけないよ」とおっしゃっていた。これが、海外でも認められる研究者になれという励ましの言葉だったことはいうまでもない。米国留学を断念した者としては身につまされる助言であるが、冷静になって振り返ると、先生が米国留学を勧めるとき、教え子が国際競争力をつけ、英語で研究成果を公刊し続けることをゴールと考えていたわけではないように思えてくる。先生はその先を見据えていたのではないか。

増田先生は、恩師の石田英一郎氏との出会いを通じて英文学研究から文化人類学、ラテンアメリカ地域研究へと歩を進めることとなった。日本社会のよりよい未来を見据えるための世界史を構想し、そのアプローチとして文化人類学を選んだ恩師の闘いを間近で見ると、増田先生に深い影響を与えたにちがいない。そんな先生は、ラテンアメリカの歴史と文化を広く日本語読者に知ってもらうことは、間接的な形ではあれ、よりよい日本社会の創造に貢献すべきだという使命感を、恩師から受け継いだのだろう。

増田先生にとってのラテンアメリカ地域研究の存在理由をこのように理解するならば、米国留学を勧める意味合いも、違った色彩を帯びてくる。国際競争力を身に付けた教え子たちがその成果を日本に還元することで、ラテンアメリカの面白さ、大切さをより多くの日本語読者に知ってもらい、新たにラテンアメリカ研究を志す若者、さらには彼／彼女たちを支援する人を増やすという、人的資本の拡大再生産過程の構築こそが、先生の視線の先にあっ

たと思えてならない。先生は、この目的のために闘い続けたのだ。

この仮説が間違っているとすると、増田先生の功績の大半が説明できない。国際学界で成功することを目標にしたとすれば、東京大学に中南米分科を創設するのは時間の無駄でしかない。日本ラテンアメリカ学会創設にしても同じこと。国際学界で評価されない日本語の単著を多数公刊し、あまつさえ大航海時代叢書という気宇壮大な翻訳事業を手掛けるなどというのは、愚の骨頂だろう。

4.

中南米分科で助手をしていた頃だったと思う。増田先生から、「きみは保谷市（現、西東京市）に住んでいるんだよね。最近あそこの市長に会ったけど、なかなかの人物だね」と言われ、答えにつまったことがあった。聞くと、日本民族学振興会の建物の移転保存に関して市役所に足を運び、交渉したとのこと。当時の私には、尊敬する増田先生がそんな雑務を引き受け、しかも一地方政治家を高く評価するなんて信じられなかった。が、初めて警咳に接したころの先生と同じ年頃になり、先生の真意が分かったような気がしている。

先生にとり、おそらく振興会解散に関連するこの業務は雑務ではなかった。それは、民族学を日本社会に根付かせるべく闘ってきた諸先人の労に報い、これからも自分は闘い続けるという決意を固めるための一歩だった。そして、この闘いにおける地方政治家は、学問の意義を理解できない門外漢ではなく、今後、上記の拡大再生産を支援してくれるかもしれない、潜在的協力者と位置付けられていたにちがいない。

闘い続ける先生の姿は私の中でいつも輪郭がぼやけていたのだが、運動を停止されたことでようやく一つの像が結びつつある。その像を文章化することで、増田昭三先生を偲ぶ言葉としたい。

註

- 1) 80歳を超えても海外から、イギリスの海上帝国化やヴァスコ・ダ・ガマの生涯を扱った書籍などを取り寄せていたそうで、「大航海時代」の命名者にふさわしい選書である。
- 2) そこには留学中の小林一宏会員もおられたかもしれない。